響き合い　笑顔の花咲く　活力ある学校

南部っ子

第23号

平成18年11月20日

寒河江市立南部小

主体性を育てる

校長　安食　洋一

家庭や職場で、子供達も大人たちも、「～していいですか。」という問いが多い気がする。これは、他人に判断を任せ、自分の責任ある思考をやめていることだろう。その裏には、謙そんや奥ゆかしさとは程遠いすべてを他人のせいにする責任回避の姿勢や物事を損得で考える打算が見えかくれする。

また、二者択一的な思考形態に陥り、理由も聞かず、「だめ。」「悪い。」などと、すぐ否定したり、「ああ、いいよ。」「いいんじゃない。」などと返答したりして、優しく寛大なようであるが、実に無責任なやりとりがある。

「あなたはどうかんがえる。」「あなたの考えたとおりでいいよ。」と、相手に主体性を喚起してやる必要がありそうだ。子供にも、「いい。悪い」の返事をすぐするだけでなく、「おまえはどう思う。」と返してやったらどうかと思う。または、しばらく返事をしないのも、効果的だったりする。相手にしすぎないことも、主体性を持たせるのに効果的なときもある。

子供達に対しては、「教えること」だけでなく、「世話をすること」、そして、「癒してやること」その三つの総体として、心の教育があるように思える。低学年など小さい子供に対しては世話をすることは多くなる。し過ぎないようにしなければならない。何でもかんでも自主的な行動が大事であると単純化して、放任してしまい、「癒し」のことばを忘れていてはならない。「癒し」とは、「なかなかいいよ。うまい。よくできた。」などの言葉であり、優しい眼差しを贈ることでもある。その子に応じて、バランスを取りながら対処する。心の教育は、とくに「言葉による教え」だけでないのは、確かだ。

今は、「教え諭す」ことが適切か、「世話をすること」が適切か、「癒す」ことが適切なときか、見極めが大事である。

教育は、子供をよく観察することから始まり、大人自身にとって何が問題なのか深い思慮をすることである。機会あるごとに大人同士が研究し合い、他人の考えていることや感じていることを受け入れ自分のこととして生かす修養をすることが大事と考える。

禅語録の王様「臨済録」に『随處に主と作れば、立處に皆眞なり』ということばがある。「主体としての自己を見つめ直す必要がある。」ということを言っている。「すべては自分が原因」「すべての根源は自分にある。」と心得、自らを信じ、自分を磨き鍛え上げたいとしきりに思う。人のせいにせず、主体的に真摯に取り組む姿勢が子供の心を育てるものであると信じている。

＊　教育講演会より　＊＊＊＊＊＊＊＊

演題「あきらめない」

日大山形高校野球部監督　荒木　準　也　氏（五八年度卒）

日大山形の監督の荒木です。南部小学校の出身です。古い校舎で過ごしました。皆さんの先輩になります。今年山形県勢では初めてベスト八にはいりました。でも、優勝できなかったことは悔しく思います。必ず優勝めざして頑張ります。

簡単な言葉ですが、「あきらめない」ことを心において、頑張りました。今のチームも、失敗から出発しています。

三年生が一年生に入学した年、夏の県予選は一回戦コールド負けでした。どん底からスタートしたチームです。そのとき、この失敗を学びに変えていこう、当たり前のことを当たり前としてやっていこうと思いました。気持ちがなければどんなことにも立ち向かえないと考えたからです。「心・技・体」に加えて「知力」が必要です。知力とは、野球を知ることです。しかし、勝利を勝ち取るには、運が必要です。負けないという気持ちが運を運んでくるのです。練習をだらだらやれば強くなるというものではありません。精神力がなければ、技術もうまくならないのです。

選手たちに特にうるさく指導していることは、第一にあいさつです。部活の関係者だけでなく、グラウンドに来るすべての人に気持ちよくあいさつをしようと指導しています。第二に、感謝の気持ちを持つことです。一人で野球はできません。みんなの協力があって成り立つのです。そこにも、感謝の心を持つことが大切です。（略）

第三に、思いやりの気持ちを持つことです。まず、人への思いやりです。野球部は、全員一つのファミリーです。三年生は長男、二年生は二男、一年は三男です。思いやりをもって、練習に取り組んでいます。キャッチボールをするにしても、相手の取りやすい所に投げます。これも、思いやりです。次は、道具への思いやりです。グローブやバットをしっかり磨いて大切に保管することが大切です。（略）

去年の秋の東北大会では、初戦コールド負けをしてしまいました。もう一度、目標設定をきちんと立てることから始めました。今年の夏、甲子園に出場して校歌を歌おうという目標をたてました。選手がみんな同じ気持ちにならないと、勝つことはできません。十月末の南部小文化祭では、みんな一つになって発表していました。だから、とてもみる人に感動を与えました。

甲子園は、高校球児のあこがれです。しかも、三年間でしか立てられない目標です。自分が高校二年生の時、甲子園に出場しました。二回戦で山口県の宇部商と対戦して、八対〇で負けてしまいました。そのとき、今振り返っても何をしていたかわかりません。地に足がついていない感じでした。その場だけのよそ行きの

南部小のホームページには子どもたちの笑顔がいっぱいです！ご覧下さい！

「しっかり止まって、はっきり確認！」薄暮時の子ども達の下校の安全にもご注意をお願いします。

プレーでは、勝てないことを痛感しました。普段通りのプレーをすることが大切なのです。粘り強く・熱く・泥臭くという日大山形の野球部のチームスタイルをなくさないで、気持ちを全面に出してプレーすることが勝利につながるのだと痛感しました。全員同じ気持ちにならないと、勝てないのです。

ベンチ入りは、十八人の選手です。しかし、試合は九人で行います。全員が同じ気持ちにならないと勝てません。うちのチームには、スター選手はいません。だからこそ、みんなが一つになって、チーム力で戦うことが大切なのです。夏の甲子園で、愛媛県今治西との試合では、延長十三回、十一対十でサヨナラ勝ちを収めることができました。あのとき、全員が最後まであきらめませんでした。一人でもあきらめると、それがチームに伝染するのです。最後まであきらめないでいっしょうけんめいやるという気持ちが、ミラクルを起こすのです。

延長十三回表の守備の時、青木選手がめずらしくエラーをして、点をとられました。ベンチに帰ってきて、がっかりはしていましたが、チーム全体あきらめてはいませんでした。今までも、ミスはおかしても、必ず取り返せるチャンスがありました。十三回の裏になって、先頭バッターが出て、また青木に打順が回ってきました。その大事な場面でヒットが打てて、逆転勝利につながったのです。練習試合でも、エラーをしても直ぐに代えることはしませんでした。そのミスを挽回するチャンスをあげるためです。

なんでも失敗から始まるのです。失敗にくじけずにチャレンジしようと呼びかけたい。くやしい気持ちがあるから、次につながります。くやしい気持ちがなければ結果につながりません。どんどん失敗をして、たくさんのことを覚えていきましょう。先生方に怒られたときも、なぜ怒られたか、考えていきましょう。いい人間に成長して欲しいという先生方の願いがあるからです。失敗は、取り返すことができます。最後まであきらめないでいっしょうけんめいやることが大切なのです。

＊去る十一月七日（火）本校の体育館において、子どもたちに「あきらめない」の演題で、熱く語っていただきました。子どもたちも語らしい先輩のお話によく耳を傾けていました。

＊　ＹＴＳ小学生スピーチコンテスト参加　＊＊＊＊

「ありがとう、命」

六年　和田弥生

「生まれましたよう。」

待合室のドアが開くとともに、看護士さんの声が飛び込んできました。

「お母さんも赤ちゃんも無事だよ。」

私はその言葉を聞いて、涙がこぼれそうになりました。なぜかというと母子ともに危険な状態だったからです。

「赤ちゃんできたみたい。」

去年のむし暑い八月、台所で私が手伝いをしている時に、お母さんがお腹をなでながら言いました。

「えっ、本当。」

私はあまりにも急なことだったので、とても驚きました。そして、じわっと嬉しさがこみ上げてきました。

次の日、お母さんと産婦人科に行くと、

「おめでとうございます。」

先生の一言で、私は本当に幸せな気分になりました。

しかし数日後、私の喜びは不安に変わりました。お母さんのつわりが始まったのです。食べ物も水分も受けつけなくなりました。そして、とうとう一週間入院することになったのです。心配そうな目で私を見るお母さんに、

「大丈夫、家のことはまかせておいて。」

と、自分に言い聞かせるように、私は言いました。本当はお母さんの体が心配でたまらなかったのですが。退院後もお母さんのつわりはよくならず、ようやくおさまったのが、秋も終わりかけた頃でした。

「あっ、動いた。動いたよ、お母さん。」

十二月になると、お腹の中の赤ちゃんが活発に動くようになりました。

「よっぽど元気なんだね。」

私はお母さんのお腹を触るたびにそう感じていました。お母さんのお腹がどんどん大きくなると同時に、出産予定日がだんだん近づいてきました。しかし、予定日を十日過ぎてしまい、お母さんはまた入院することになってしまいました。陣痛を起こす点滴を始まりました。痛がっているお母さんを見て私は、「お母さん頑張って。がんばれ。」と、ぎゅっと手を握りしめました。そろそろ生まれるという時、大変なことが起こったのです。先生が、

「赤ちゃんに酸素がいっていない。すぐに出してあげないと、赤ちゃんもお母さんも危ない。」

と言ったのです。

「えっ。」私は今にも泣きそうになりました。急きょ帝王切開という形になりました。私は突然の出来事に信じられないほど、驚きました。「お母さん、赤ちゃん、頑張って。」私は、目をつぶって、泣きそうになるのを必死でこらえて祈りました。

「おぎゃあ。」「う、生まれた。」

お母さんには、本当に感謝しています。赤ちゃんの「いおり」が今この世界で生きていられるのは、お母さんが頑張ったから、お腹の中で、いおりを大切に育てたからだと思います。それにお母さんがいたから私や妹も生きているんだと思います。

私は、いおりにも本当に感謝しています。なぜかというとこの世に生まれてきてくれたから。いろりが生きて生まれてきたのは、お母さん、お父さん、妹、そして私にとって一番幸せなことだから。それにいおりは、えらい。母子共に危険な状態にいたのに、小さい命を懸命に輝かせながら生まれてきてくれたからです。いおり、ほんとうによく頑張ったね。そして、お母さん、お父さん、私達に命をさずけてくれて本当にありがとう。

南部小ＨＰには、６年生が更新しているブログ　**子どもビオトープ「なかよしこみち」**があります。コメントをお待ちしています。